Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

西条祭り・伊曽乃神社祭礼 2007年

岩井, 正浩

(Citation)
表現文化研究,7(2):161-168

(Issue Date)
2008-03-24

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002888

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002888

調査報告｜©2008 神戸大学表現文化研究会｜2008年2月7日受理｜
Research Report｜©2008 SCBDMMT, Kobe University｜Accepted on 7 February 2008｜

西条祭り・伊曽乃神社祭礼　2007年

Isono Shrine Festival on Saijo Matsuri in Ehime Prefecture, 2007

岩井正浩　Masahiro Iwai

1. はじめに

人口58,000人の西条市は、西暦158年に景行天皇の第2皇子武国疑別命（たけくにこりわけのみこと）が伊曽乃神社付近に館を設け、この地方を治めたのが始まりだと言われている。

西暦1636年には伊勢神戸の城主一柳氏が西条藩主に封じられ、1670年に紀州藩主徳川頼宣の次男松平頼純（家康の孫）が藩主となり3万石の城下町として栄えてきた。西条祭りが小さな町で、小字単位でだんじりを出すという財力は、西条藩主が江戸詰めで参勤交代もなかったことで、財政的に余裕を生み、祭りが発展したと推測できる。

愛媛県西条市の西条祭りは、日程順に嘉母神社（10月6-7日）、石岡神社（10月14-15日）、伊曽乃神社（10月15-16日）、そして飯積神社（10月16-17日）で行われる祭りの総称である。発祥については推測の域を出ないが、伊曽乃神社に所蔵されている『西条祭絵巻』が元禄時代のものであるといわれ、宝暦11（1761）年に屋台が1台、天明6（1786）年の『磯野歳番諸事日記』に13台、さらに文保8（1837）年の『西条花見日記』には約30台の屋台・笠鉾・楽車・御輿楽車等として記録されている[1]。それにさかのぼる宝暦7（1757）年には氷見の石岡神社に屋台が登場している。2007年度の太鼓台、だんじり、みこしの運行は次の通りであった。

嘉母神社	太鼓台	6台
石岡神社	だんじり	27台、みこし2台
伊曽乃神社	だんじり	75台（予定では77台）、みこし4台
飯積神社	太鼓台	10台

2. だんじり、みこし、太鼓台

西条祭りにおけるだんじり、太鼓台、みこしは、それぞれ意味が異なる。石岡神社と伊曽乃神社祭礼におけるだんじりとみこしは類似している。だんじりは屋台とも呼称され、木製組立式の2階もしくは3階の形式で、四方を武者絵、太閤記、平家物語、花鳥などの彫刻で飾られた「透し」で、白木と塗りの2種類がある。高さは5メートル余りで重量は約600～800キログラム、それを15～20名で担ぐ。囃子は太鼓と鉦で《伊勢音頭》が歌われる。だんじりは江戸期には「楽車」とも呼称されていた。

みこしは、一般的な「神輿」ではない。後者は「しんよ」と呼称されている。みこしは高さ5メートル、重量が約2トンである。大型の木車（直径約1.8メートル）を付けている。四方を昇龍、降龍など金糸銀糸の刺繍で飾っている。中段は龍宮、陽明門など金糸で高縫いし、三角面や高欄幕も龍・獅子などの高縫いをしている。運行は、かき棒2本を付け綱で引くが、木車が2個だけなので前後に大きく揺れることが特徴である。囃子は太鼓（これは面を上に向けて2人で打つ）と鉦で、以前には笛があった。

嘉母神社と飯積神社祭礼での太鼓台は、「みこし」と似ているが、木車が無く、約12メートルのかき棒4本で担ぎ、新居浜の太鼓台と類似している。太鼓台には天幕（赤と白模様）があり、四方に白い房を垂らし勇壮に担きあげて揺らせ、美しさを披露する。飾りはすべて金糸銀糸で昇龍・降龍・龍宮・虎などを高縫いしている。高さは5メートルを超え、重量は約2.5トン、太鼓で囃す。

船形だんじりの最後は昭和15年まで。銅板の部分がふすま絵、神拝（すなもり、錦町）に部分が残っている。絵師は当時、庄屋お抱えであった。ふすまだんじりは、喧嘩や雨で破れやすく廃れていった。

嘉永元（1848）年の『雨夜之伽草』の「西條花見車」には、祭りの様子が描かれている。9月14-15日には

> 狂言臺を曳来り、上組下組二車の子供狂言替々／＼あり。十五日ニハ生土子十八ヶ村……、其外枝村御下の町々より楽車様々の造り物に金銀を鏤たるを出し、此所ニて行列を整ふ。……此楽車といふハ、家の形造にして二重或ハ三重の高欄付にて、……中に美麗の子供化粧をなし、派手なる衣装を着飾り、天鵞絨錦なんどの手覆をなし、色々の縮緬を二筋三筋襷にし、太鞁鉦を鳴し笛を

吹く。此楽車ハ車にて引也。……其跡獅子、其次大太鞁を舁かせ笛吹太鞁打付添ふ。……
其次船楽車とて粧ひ飾りたる船の形の楽車の内にて大鞁を打船謡を諷ふ。船玉明神ハ細き神輿也。末社に祭奉る。

その後、お城（現西条高校）に向かった楽車は、

御堀端に並ひて、調子を正して囃立る。綺羅川風にひらめき堀水に映して壮観というへくもあらす。
　時ならぬ花や紅葉を見つる哉芳野初瀬の麓ならねと
と詠しも斯る事おやいひしならん。見物の数万人の山を築く。警固の武士非常を禁めて威義洋々たり。弥宜ハ管弦を奏し神楽謡ひ、八乙女ハ白妙の袖を翻して舞ひ、大宮小神司ハ説言を誦け幣昂を捧ぐ。

終日、町内を巡行した神輿と楽車は、加茂川を渡って伊曽乃神社へ宮入するのだが、その川渡りについて、

夕陽映して晃く。晶にして無双の壮観なり。見物の男女さしもに廣き川原に充満し、人また人に立籠て、川風温く翩々たる扇遣ハ花に聚く故蝶と奇る。

とあり、現代の祭りと同じような光景が描かれている。そして「弾あり諷ふあり舞ふあり踊るあり……此両日の賑ひハ中々拙き筆に尽し難し。」と結んでいる[2]。江戸期の西条祭りが芸能のるつぼと化し、住民が高い文化を育んでいたことがうかがえる。

3. 音楽と《伊勢音頭》

享保頃に上方で流行し、その後全国的に流行した《伊勢音頭》は、西条祭りでも明治末期頃には歌われ始め、大正時代初期には広く歌われていたと言われている。ただ和歌山（紀州藩）との直接な関係はなく、伊勢まいりで西条にも広まった。その後1957年には「第1回西条祭り伊勢音頭大会」が開催され、次のような歌詞が歌われた。

伊予の西条の名物名所　伊曽乃まつりに武丈桜
西条伊曽乃祭りの日には　屋台かく人勇ましや
伊予の西条は紀州のわかれ　三つ葉葵の紋所
西条上場で育った夢は　祭り太鼓で実を結ぶ
伊曽乃の神様だんじり好きよ　わたしゃあの子の歌がすき
伊予の西条のだんじりみこし　花の銀座で舞を舞う[3]

歌詞には各町独特の内容もある。また砕けた内容も少なくない。古い歌詞には次のような内容のものがある。

吉田通れば二階から招く　しかも鹿の子の振袖で
お伊勢参りにこの子ができた　お名をつけましょ伊勢松と
来るか来るかと浜に出て待てば　浜は松風音ばかり
わしが国さはお伊勢が遠い　お伊勢恋しや参りたや
千秋万世楽思うこと叶うた　末は鶴亀五葉松

ただ、現在は、全国的に知られた歌詞が一般的に歌われている。

伊勢は津でもつ　津は伊勢でもつ　アラヨーイヨイ
　尾張名古屋は　ヤンレ城でもつ
　　ササ　ヨートコセーノ　ヨーイヤナ　コレワイセ
　　ササ　ナンデモセ
ここの屋敷は　めでたい屋敷　アラヨイヨイ
　鶴と亀とが舞を舞う
うれしめでたの　若松様は　アラヨイヨイ
　枝も栄えて葉も茂る

節回しや囃子言葉は、各町で差異がある。《伊勢音頭》はだんじりとみこしで歌われる。みこしの《伊勢音頭》はゆっくりと長く延ばす特徴がある。歌詞はだんじりと同じであるが、独特な歌詞もある。

飲めよナー　騒げよ　今宵限り　アーコリャコリャ
明日は出船の　ヤンデー舵枕
コリャリャ　ヤートコーセーノ　ヨーイヤナー
アリャリャ　コレワイセ　ササー　ナンデモセー

浜に魚は数々あれど　中でも海老というやつは
頭に金銀兜負い　背には梓の弓を張り
腹には千匹子を抱いて　ピンとはねたら悪魔除け[4]

みこしを出す町のひとつである喜多浜は漁師町であり、海や漁に関する歌詞が歌われるのだろう。

西条祭りには囃子としての楽器、《伊勢音頭》がある。楽器はみこしに太鼓・締太鼓、鉦が、太鼓台には太鼓が積まれ、打楽器のリズムで運行する。以前には笛が

吹かれていたが現在はなくなっている。1959年の「第3回西条祭り伊勢音頭大会パンフレット」には、表紙に「ふたたび響けみこしの笛の音」とあり、復活を願い国田徳太郎氏の笛を岡田千歳氏が採譜した楽譜を掲載している[5]。

だんじりの太鼓は「御立太鼓」、「上り太鼓」、「下り太鼓」そして「走り太鼓」に分かれる。「御立太鼓」は「チャンギリ」、「三ツ星」などと呼称され、主としてだんじりが停止または出発前に打たれる。ただ神拝(かんぱい)地区(以下、地区を取る)では運行中にも打たれることがあり、「シャンギリ」(氷見)、「チャンギリ」(福武および大町)、三ツ星(神拝)とも呼称されていた。シャンギリはもともと村の人を集める太鼓であった。【楽譜1、2】

「上り太鼓」は一般的な打ち方であるが、氏子によって異なっている。また神拝では前奏と早足もあり、装飾音も多い。さらに福武には古式なリズムが伝承されている。「下り太鼓」は他にも「宮出し太鼓」(神戸(かんべ)、氷見)、「お旅と町まわりの太鼓」(神拝)と呼称され、美しい音色をもっている。さらに「走り太鼓」はみこしのように走りながら太鼓を打つ。笛は以前、運行とともにみこしで吹かれていたが現在では伝統的な旋律はなくなった。一方で、だんじりにはなかったと言われていたが、現在は新しい旋律が御供だんじりの「本町」や、「安知生(あんじょう)」で吹かれている。

みこしの太鼓には「運行」と「お旅(テレツク)」がある。「運行」のリズムは単純だが、「お旅(テレツク)」は複雑である。そして女の子達によって笛が吹かれる。ただその旋律は1983年に「中西」の国田徳太郎氏が吹いた旋律と類似してはいるが、簡略化されている。

4.「松之巷(まつのこうじ)」の西条祭り

だんじりの一つとして「松之巷」の家躰(やたい)がある。この屋台は建造150年記念の歴史ある＜塗り＞の屋台である。【写真4】

松之巷家躰は、安政5(1858)年頃、氷見古町家躰として製作され、大正元(1912)年に松之巷の所有となっている。絵師として山本雲渓、山本玉仙が、彫刻師として好道が担当し、胴板に「八幡縁起」が施されている。現在の重さは600キログラムであり20名ほどで担いでいる。15日だけで14～15キロの距離を回る。松之巷は70軒で43軒が家持ち、老人・後家さんが10数軒、30軒位の男が担当している。地元半分、他地区へ移っている他町内が半分である。「花集め」は基本的にやっていなかった。昔は自治会、今は松之巷総代会と青年団が運営・運行を、自治会が所有している。

［松之巷屋台の運行計画］

14日

8:00 ＝青年団集合(子どもの国)、「花集め」の準備

14:00＝「花集め」出発

17:00＝「花集め」終了。町内に到着

こどもの国→グランフジ→中央病院→クラレ→局(つぼね)→新堀→こどもの国

15日

2:30 ＝青年団集合(宮だし準備)

3:00 ＝宮だし出発

8:30 ＝町内に到着

9:00 ＝「花集め」に出発

16:30＝「花集め」終了。町内に到着

午前:こどもの国→喜多濱→港新地→森鉄工→八丁→下喜多川→TSUTAYA→こどもの国

午後:こどもの国→常陸巷→明水荘→武徳殿→商店街(紺屋町)→商店街(登道)→西条駅→隆昌禅寺→魚屋町→こどもの国[6]

5. 2007年、伊曽乃神社祭礼

西条祭りは愛媛大学勤務時代にも数回調査を実施していた。今回は伊曽乃神社祭礼の3日間を対象としたものである。この調査は西条市役所総務部秘書課秘書係長柳原政彦氏、および西条市松之巷(まつのこうじ)の高橋清志氏のご協力に負うところが大きかった。

『伊曽乃大社祭礼絵巻』(1850年頃)には当時の西条祭りが描かれている。「御神輿の渡御行列図」には、だんじり18台、神輿、太鼓5台、船だんじり、鬼頭、鉄砲組、奴、神輿(しんよ)、諸道具類が、「御殿前略景」には西条藩士の礼拝する様子が、「御旅所略景」には御旅所の賑わいが、そして「子供狂言之図」には狂言が多数の観衆の視線の中でカラーで描かれている[7]。

みこしは以前、1.25トンほどだったが、現在は2.5トンで、小字単位で運行している。だんじりは、武者絵が殆ど。土居出身の近藤泰山氏の彫刻は質感・立体感がある。製作は明治27年～昭和27年で白木のまま、材質はヒノキである。練習は9月に入ったら開始する。練習太鼓は2～3歳頃から打っている。黒い帽子は、おしゃれで＜ソフト帽＞と言われていた。祭りが終ると17日は解体する。漆を塗ってあるので解体してメンテナンスする必要がある。解体しないで倉庫に入れているだんじりもある。

［伊曽乃神社祭礼運行コースおよび時刻予定］

14日

前夜祭 18時ころより運行。

15日

2:00～6:00 伊曽乃神社境内で宮出し、その後市内各所屋台運行。

16日

2:00 お旅所（大町）で神様をお迎えする。80台ほどの屋台（だんじり）が蝋燭をつけ入場。最後に4台のみこしの練り比べ。ここより統一行動。番号順に御殿前へ向かう。

7時頃 御殿前（明屋敷）。担き比べ。昼ごろに玉津へ。

9:25	土橋
9:50	かけひ
10:05～11:05	古川玉津橋線
11:30	横黒
11:45～12:50	玉津
14:20	中町小川から2手に分かれる。
15:00	大町四辻
15:30	加茂川（メロディ橋付近）へ。
16:40	川入り
16:55	川上り
18:00	宮入

10月15日（月）

未明1時50分に西条駅前の祭囃子の喧騒で目覚めた。今朝は2時から宮出しであり早速準備して飛び出す。途中で10台ほどのだんじりが大通りに勢ぞろいしていた。これから伊曽乃神社へ向かうところだった。徒歩でだんじりとともに神社へ。女の子もだんじりの後ろを押し、掛け声をかけている。2時半頃神社に到着。すでに1番を運行する「中野」をはじめ、地元の「福武」や多数のだんじりが控えていた。次々とだんじりが神迎えに挨拶をしていく。《伊勢音頭》を高らかに歌う。中には《デカンショ節》や《ノーエ節》[8] も登場してくる。神社への坂は慎重に車をはずして持ち上げる。提灯が揺れて美しい。急に眠気が襲ってきたので、お参りをして少し椅子で休む。4時30分に神官が到着し神事が開始する。少々冷えてきた。焚き火で体を温める。神事とだんじり囃子はまさに＜静と動＞だ。

神輿（しんよ）は市内を巡行し、御供だんじりが付いていく。夕刻に初めてお旅所に鎮座する。5時35分～5時52分、白みかけた空の空間で電気を消し、白幕を張り、太鼓が連打される中で御霊移しが行われた。6時すぎ、すっかり夜が明けた神社を神輿の行列が出発、神社の入り口で神事を行い、車をつける。【写真5】だんじりは自由運行で次々と各々の町へ向かっていく。御供だんじりの「本町」は神輿（しんよ）から離れ、小型橋を渡って対岸へ。そこで3～4名が笛を吹き、《伊勢音頭》と競演する。拍子は、4－4－2－2－2－3－2－2－3で太鼓のリズムと連動している。笛は7穴で篠笛だと思われるが漆を塗っている。道端には酔いつぶれている若者や女の子もいる。子どももこの宮出しで太鼓を打ち、父親に連れられて観賞している。会社・学校はすべて休みだ。宮出しの後、だんじりは提灯をはずして市内運行（「花集め」）に向かった。

11時30分、「安知生（あんじょう）」のだんじりで女の子が新作の笛を吹いていた。本人もこの旋律は伝統的ではないと認識している。太鼓と鉦の担当は子どもが多い。【写真2】 場所は底に陣取り幕を張っている場合と、1層上で見えない場所に設置しているケースに分かれる。運行時は車を取り付け、子どもや女の子も曳いている。今日は月曜日だが当然学校も休みだ。JR西条駅のロータリーに次々とだんじりが練ってくる。だんじりはすれ違うところで互いに揺らし、「ソーリャ ソーリャ」と言って挨拶をする。昼は天気も上々で、未明の寒さとは随分と違っている。JR西条駅までは車を取りはずし、肩に担ぎロータリーをパフォーマンスする。相当の体力が必要で、若者が多い地区でなくては困難だ。それと持ち上げてから地面に下ろすときは危険が伴っている。どうしても片側に傾いてしまうからだ。担ぎと差し上げは明らかに違う。数台の子どもだんじりも登場した。

西条祭りは、子どもも自然に参加し、小字レベルでのまとまりができている。その中心である青年団が輝いている。全国で青年団が衰退している中、沖縄のエイサーのように青年団が中心として活動しているのだ。戦後誕生した高知よさこい祭りは、西条祭りと比べ神事性がなく新しい都市の祭りとしては対極をいく。ただ、その祭りを支えているのは地区町内会であり商店街だ。こういった小さな地区単位の祭り創造は地域・コミュニティの活性化・維持に欠かせないだろう。ホテルから晴れ上がった空に石鎚連峰がくっきりと浮かび上がっていた。

「中西」のみこしがロータリーへ入って来た。太鼓は縦に据え置き、2人が交代で打ち、あと締め太鼓と鉦が合わせる。ゆっくりと進行する。日が暮れてきた。駅前のみこしには提灯を付け始めた。もう今日は打ち上げかとおもったら18時過ぎ、みこしとだんじりが次々とロー

タリーへ繰り込んできた。提灯が美しい。しかし、今朝2時、終日「花集め」で運行、そして夜にも運行。明日も2時、終日運行が待ち構えている。これが祭りなのだ。

10月16日（火）

3時30分目覚め、5時頃に行ければと思っていたが早速飛び出す。登り道で2つのみこしに出会う。「下喜多川」は「太鼓台」という幟を掲げている。基本的には太鼓台だったという。まただんじりも屋台と銘打っている地区も少なくない。そしてみこしは「神輿＝しんよ」だ。

＜登り道＞を前へと進んで行き、4時半に＜お旅所＞到着。別世界だ。だんじりの提灯がずらりと並び、お旅所の前で担ぎ上げパフォーマンスだ。この光景は実に30年ぶりだ。松之巷の高橋清志氏に会い、下るとき《伊勢音頭》を歌いつつ運行する地区「北之町上組」を紹介していただく。提灯はだんじりで100～120個、みこしで300個飾ってあり、運行のロウソクがゆらゆらと揺れて美しい。5時10分に第1番の「中野」が出発。その後「北之町上組」に随行していく。ずっと下っていきアーケードもくぐった。御殿前（現西条高校）へ随分と遠回りをしての運行だ。途中で75番すべての地区をVTRに収める。ふと気が付いた。8時40分から御殿前で担き比べが始まっていたのだ。急いで近道をして現場へ。御殿前の門の前で各屋台が高く差し上げてパフォーマンスをしていた。高橋氏によると西条祭りは、①宮出し、②お旅所、そして③御殿前の担き比べ、だという。「川入り」は多くの観光客に見せるためのパフォーマンスで付け足しのイベントだということだった。最後に4台のみこし（中西、下喜多川、喜多濱、朔日市）が威勢よく繰り込んできた。【写真1、3】

みこしは見せる機会が少ない、あくまでも単独行動である。入ったり出たりしてしばらく観客を魅了した。観客もみこしには格別の興味を抱いているようだ。一風変わっていて75台のだんじりとはひと味違う。9時35分、調査をほぼ終了した。睡魔が襲ってきた。未明から6時間カメラを担いで歩き回ったからだろう。

バス停で瀬戸内バスの職員と話す。彼も女の子の行動や若者のマナーの悪さを嘆いていた。30年前と比べると、女の子（中でも中高校生）が増加し、だんじりを押すだけでなく、周りで騒ぐ者も少なくない。ホテルのフロントに荷物をデポし、自転車を借り町を練り歩く屋台を追った。途中で星加店でなつかしの「ゆべし」を買う。「錦町」で歌手の秋川雅史氏が担いでいた。また、町中運行の中でほほえましい光景に出会った。幼児の持つ手作りの屋台に、大人の屋台が道路横に屋台をつけ、「ソーリャ　ソーリャ」と対応していた。また幼児が実際に屋台の綱を持って歩き、屋台に乗り、また太鼓や鉦を打っている。屋台を安全に担ぐ知恵、太鼓や鉦のリズム、《伊勢音頭》や掛け声を体得していることは、幼児や子どもたちが青年に成長したとき、屋台を担ぐ未来が開かれている。

14時10分、加茂川土手へ。すでにアマチュアカメラマンたちが場所取りをしていた。斜面に新聞紙を敷いて座るも不安定だ。まずみこしが景気づけに来る。15時40分から集合の予定だったが、最初のだんじりは15時40分に来る。16時40分に川入りが始まるということだったがだんじりはポツリポツリとしか来ない。神戸地区のだんじりが橋を渡って西岸に到着。その台数は6台。みこしとの競演がえもいわれぬ雰囲気を醸し出す。16時40分にすべてのだんじり集合の予定が結局1時間遅れた。17時50分、神輿が到着。その前から東岸のだんじり6台は川に入っている。まず川上に神輿を追いかける。そして次第に川下へと移ってきた。結構あっさりと西岸に神輿は上陸した。臨時のお旅所で祈祷があり、伊曽乃神社へと宮入していった。だんじりも神社へ行く地区が神輿の後を追った。その終了は18時30分だった。とっぷりと陽も落ちてだんじりの提灯があざやかに土手を照らしていた。【写真6】

6. おわりに

西条市は恵まれている。これほど地区（小字）に密着した祭りがあり、名水、石鎚、そして城跡がある。自転車で市内を回っても結構広い。ただ、大型店舗が商店街とは距離を置いた場所に開店しているため、商店街は寂れてきている。高知県須崎市や高知市の状況と類似している。

西条祭りを成立させている要因は何か。一つには1670年に紀州藩主徳川頼宣の次男松平頼純（家康の孫）が藩主となり3万石の城下町として栄えてきたことであろう。そして西条藩主は江戸詰めで参勤交代もなかったことが、財政的に余裕を生み、祭りが発展したと推測できる。また西条市が小さな町の単位であり、小字単位でだんじりを出すという競争原理が働いたこともある。たかだか人口58,000人の西条市に75台のだんじりと4台のみこしが存在していることが驚異である。産業的にも豊かな水源と農業、瀬戸内海に面し漁業を発展させたこと、新居浜工業地帯のベッドタウンとしての立地および近年の企業誘致は、人口の減少を食い止め、若者の残留を促してきた。祭りや民俗芸能の存続・発展

の基本的条件は整っている。さらに神事としての伝統が綿綿と続けられてきていること、それを支える青年団の活動が小字単位で行われていることなどだ。そして神事に加え、風流としての＜見せる・魅せる＞要素もふんだんに取り入れてきている。その一方で笛や《伊勢音頭》の伝承が気がかりでもある。

ともあれ、瀬戸内海沿岸部に分布するだんじり、屋台、太鼓台の一環として西条祭りの位置する意義は限りなく大きい。

写真1 「御殿前のみこし」(10月16日)

写真2 「だんじりの鳴物」(10月15日)

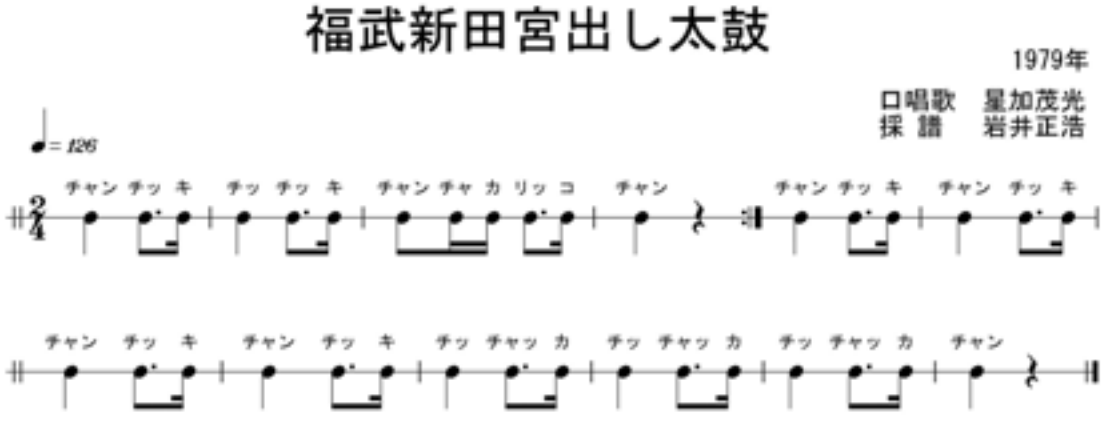
写真3 「御殿前のだんじり」(10月16日)

写真4 「松之巷」のだんじり(10月15日)

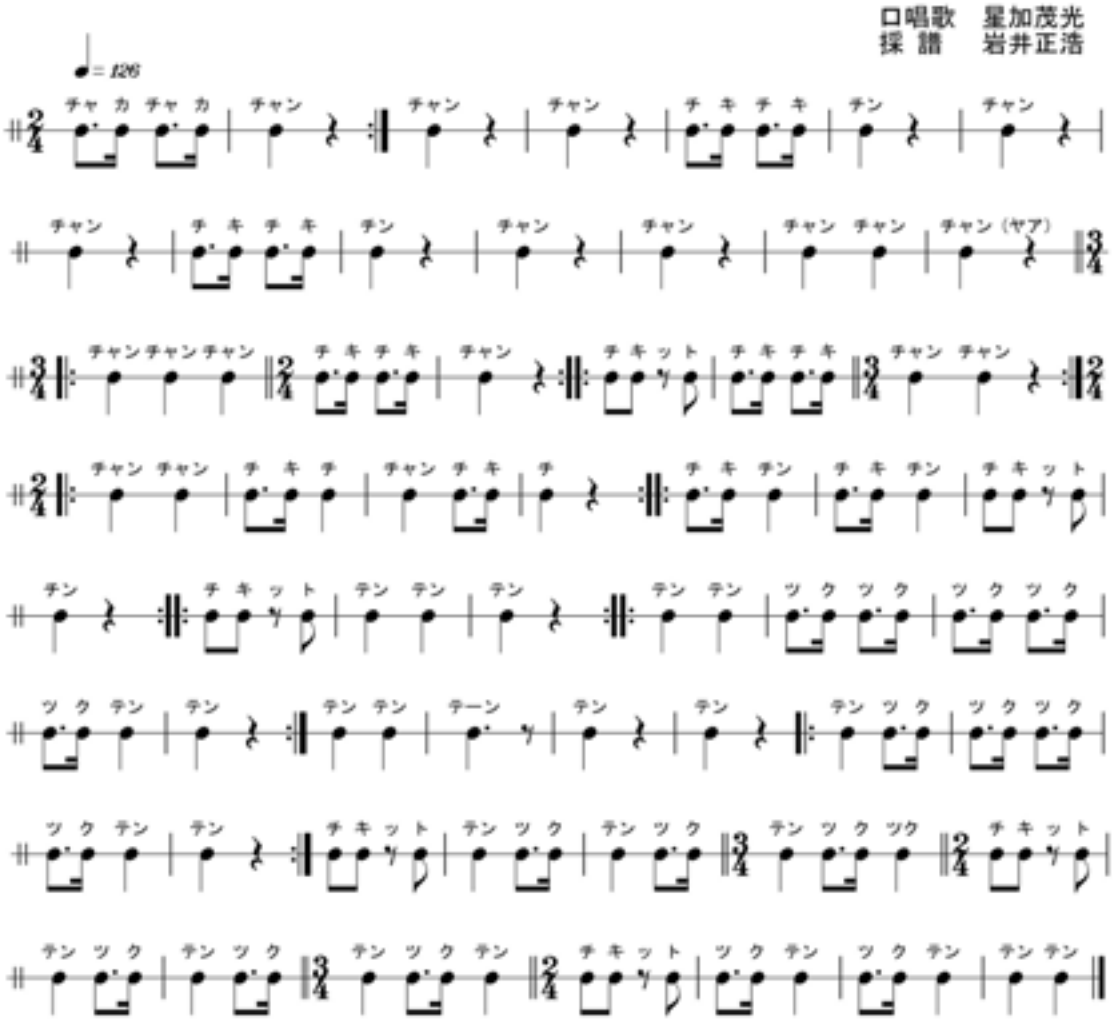
写真5 「伊曽乃神社宮出し」(10月15日)

写真6 「神輿の川入り」(10月16日)

リズム楽譜1　福武新田「宮出し太鼓」＝1979年録音



リズム楽譜2　福武新田「チャンギリ」＝1979年録音



図版出典

写真、楽譜は全て執筆者による撮影、作成。

注

1 村上俊行『伊よ西条だんじり祭り』、1977年、10-11頁。
2 愛媛県『愛媛県史 資料編 文学』、1982年、850-858頁。
3 西条祭り伊勢音頭保存会 「第3回西条祭り伊勢音頭大会パンフレット」、1959年。
4 西条市『西条市生活文化誌』、1991年、928-934頁。
5 西条祭り伊勢音頭保存会 「第1回西条祭り伊勢音頭大会パンフレット」、1957年。
6 松之巷総代会・青年団『松之巷家躰』、2007年、及び高橋清志氏からの聞き取り。
7『西条祭絵巻』(伊曽乃大社祭礼絵巻)。昭和25年より伊曽乃神社所有。今回は高橋清志氏所蔵の資料より考察。
8 三島市観光協会(info@mishima-kankou.com)によると「江戸時代の末期、今からおよそ150年ほど前の嘉永年間、伊豆韮山の代官「江川太郎左衛門坦庵公」はわが国を外国の攻撃から守る必要性を幕府に訴え、韮山に反射炉を設け大砲を製作するかたわら、若き農夫を集め、彼らを兵力とするためその訓練に力を注いでおりました。そんな時、海外の技術を学び、長崎から戻ってきた太郎左衛門の家臣、柏木総蔵が伝え聞いてきた珍しい音律のノーエ節に「富士の白雪朝日で解けて……」と歌詞をつけて鼓笛隊を組織したのです。その後、音律豊かな農兵節として彼ら農兵の訓練に使われたことはあまりにも有名で、諸藩の藩士は先を競って三島に訪れました。明治以降は舞を振り付け、ついには全国に知れわたる「三島農兵節」となり三島の代表的な民謡として三島夏まつりには欠かせないものとなっています。現在はその大きな役割を三島農兵節普及会が譲り受け継いでいます。」とある。

野毛の山からノーエ　野毛の山からノーエ
野毛のサイサイ　山から異人館を見れば
お鉄砲かついでノーエ　お鉄砲かついでノーエ
お鉄砲サイサイ　かついで小隊すすめ

参考文献

1 西条市『西条市誌』1966年。
2 愛媛県『愛媛県史 民俗下』1984年。
3 愛媛県歴史文化博物館『愛媛まつり紀行』2000年。

■執筆者について
岩井正浩(いわい・まさひろ)
高知県須崎市に生まれる。愛媛大学専攻科(音楽専攻)修了。愛媛大学助教授を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授。学術博士。音楽人類学・音文化研究専攻。
E-mail: iwai45ma@kobe-u.ac.jp

■Notes on the Contributor
Masahiro Iwai was born in Kochi prefecture. He graduated from Ehime University. At present, he is a professor of Graduate School of Human Development and Environment Kobe University. His research field is music anthropology and sound culture.